

## 事業計画書

事業名	認知症の人が当たり前に暮らせる地域を当事者とともに作るための住民対話
場所	沼津市 今沢 地内
実施予定期間	平成29年 7月 1日 ~ 平成30年 3月 31日
日程	実施項目・作業項目
平成29年 7月中旬	本年度の活動についてNPO法人スタッフ、中今沢地区住民、他協力者との打ち合わせ 場所：今沢地区センター 参加人数：10名程度
平成29年 9月の日曜日	第1回勉強会＋住民対話「認知症の人が当たり前に暮らせる地域とはどんな地域のことか（仮）」 講師：稲垣康次氏（NPO法人認知症フレンドシップクラブ富士宮事務局） 場所：今沢地区センター 定員：50名 参加費：1000円 募集対象者：今沢地区住民、今沢地区に関わる介護サービス事業所職員、医療関係者、行政職員、NPO法人ユートピアスタッフ等 実施内容：昨年度の認知所フォーラムの講師でもあった稲垣康次氏を講師として招き、「富士宮モデル」での取り組みを紹介して頂きながら、認知症の人が当たり前に暮らせる地域にするために大切なことを話していただき、後半ではその話を踏まえた上で、参加者全員で、認知症の人が当たり前に暮らせる地域とはどんな地域か、今沢は今、認知症の人が安心して暮らせる地域になっているか等を話し合う。
平成29年 11月の日曜日	第2回勉強会＋住民対話「認知症を自分事として考えるーVR認知症体験を通してー（仮）」 講師：下河原忠道氏（株式会社シルバーウッド代表取締役） 樋口直美氏（レビー小体病当事者） 場所：今沢地区センター 定員：50名 参加費：1000円 募集対象者：今沢地区住民、今沢地区に関わる介護サービス事業所職員、医療関係者、行政職員、NPO法人ユートピアスタッフ等 実施内容：株式会社シルバーウッドの下河原忠道氏を講師に招き、今注目されているVR（バーチャルリアリティ〈仮想現実〉の略）で認知症を実際に体験してみて、その上で、認知症当事者の目線でものを考えてみることの大切さについて講義をしてもらう。また、VR認知症の製作にかかわっているレビー小体病当事者の樋口直美氏（昨年度認知症フォーラムの講師）に、レビー小体病の特徴や困っている事等をお話しいただく。後半では、VR認知症体験を通して、今までと認知症への見方や理解がどのように変わったのかを、参加者で話し合う。
平成30年 1月の日曜日	第3回勉強会＋住民対話「認知症の本人と家族と地域住民とがパートナーとして共に幸せに暮らしていくために必要なこと（仮）」 講師：丹野智文氏（若年性認知症当事者、オレンジドア実行委員会代表） 場所：今沢地区センター

<p>平成 30 年 3 月の日曜日</p>	<p>定員：80 名 参加費：1000 円 募集対象者：今沢地区住民、今沢地区に関わる介護サービス事業所職員、医療関係者、行政職員、NPO 法人ユートピアスタッフ 実施内容：若年性認知症当事者の丹野智文氏を講師として招き、丹野氏が地元仙台で取り組まれている、当事者と当事者との対話の場づくり（オレンジドア）についてご紹介いただく。後半では、それを踏まえた上で、当事者と家族と地域住民とがパートナーとして共に生きやすい地域を作っていくために何が必要なのかを、参加者で話し合う。</p> <p>明日に向けた住民対話「この地域を認知症の人が当たり前に暮らせる地域にしていくために（仮）」 進行：六車由実（NPO 法人ユートピア理事、デイサービスすまいるほーむ管理者） 場所：今沢地区センター 定員：50 名 参加費：無料 募集対象者：今沢地区住民、片浜・今沢地区に関わる介護サービス事業所職員、医療関係者、行政職員、NPO 法人ユートピアスタッフ等 実施内容：3 回の勉強会＋住民対話を通して、では、今沢を認知症の人が当たり前に暮らせる地域にしていくためには、これからどんな活動が必要なのかを、参加者の対話で探っていく。</p>
<p>事業効果</p>	<p>事業目的でも記したように、本法人では、平成 27 年度、28 年度の二年間にわたって、認知症についてより深く理解していくための講座やワークショップ、視察を行ってきた。その二年間の活動に参加した人の延べ人数は 450 人を超える。沼津市民はその多くを占めており、この地域の高齢者が安心して暮らしていける社会を作るための共通認識や情報を持つための啓蒙的な効果はあったと言える。</p> <p>だが、実際に地域の実態を見た時に、例えば、法人事務所のある今沢地区では、いまだ、「認知症になったらおしまい」という認知症に対する偏見も根強いので、認知症の本人や家族は認知症であることを周辺住民に隠さざるをえず、孤立しているケースも多い。認知症の人が当たり前に暮らせる地域にはほど遠いのが現実なのである。</p> <p>本事業では、その今沢地区において、外部で積極的に啓蒙活動している認知症当事者等を講師に招いたり、VR で認知症を体験してみる等の勉強会を定期的で開催することで、地域住民が認知症を「自分事」と考えるスタンスを育成していきたいと考えている。それによって、地域住民の認知症に対する意識が大きく変化していくことが期待される。また、そのプロセスの中で、今沢地区の認知症当事者も、この勉強会に参加して、その場で自分の体験や意見を語れるような雰囲気を作ったり、呼びかけをしたりしていきたい。住民の意識やスタンスの変化については、毎回参加者にアンケートを書いてもらうことで把握していく。</p> <p>また、講師を招いた勉強会と住民対話の時間を組み合わせることで、今沢という地域を認知症の人が当たり前に暮らせる地域にするにはどうしたらいいのか、ということをも具体的に考えていく場を作っていきたい。勉強会と住民対話には、今沢地区の住民とともに、今沢地区に関わる介護事業所職員や医療関係者、社会福祉協議会や行政職員にも参加してもらい、多様な立場からの意見のやり取りによって、今沢地区における具体的な実践の形を考えていく。そして、最終的には、認知症の人も共に集えるサロンを作る等、具体的な実践方法を挙げていくことで、今沢地区における住民主体の今後の活動につなげていけるようにしたい。</p>

	<p>住民対話の内容については、毎回記録をとって報告書を作成し、その時に浮かび上がってきた課題について参加者全員で共有していき、次の勉強会+住民対話につなげていく。また、報告書については、個人情報の保護に注意した上で、できる範囲でホームページやSNSに公開していき、より広く意見や感想を求めていきたい。</p>
--	---

※評価の視点については、募集の手引きを確認してください。

<p><b>公益性</b></p>	<p>本事業で目指そうとしている、認知症の人が当たり前に暮らせる地域づくりは、認知症の人にとっての利益のためだけではない。むしろ、認知症当事者の目線で認知症の人でも安心して豊かに暮らせる地域を作ること、実は、高齢者や障害のある人を含めて誰もが住みやすい地域を作っていくことに繋がっていくと考えている。</p> <p>またそうした地域づくりを、行政主導のヒエラルキーの中で行うのではなく、認知症の当事者、家族、地域住民、専門職、行政職員とが対等な立場で対話をしていくことで進めていく、本事業での方式が浸透すれば、それは本事業にとどまらず、この地域における他の課題の解決の有効な手段に発展していくことが期待される。</p>
<p><b>発展性</b></p>	<p>昨年度の事業によって、中今沢結いの会や今沢に関わる介護事業所、医療関係機関、他地域で地域づくりを進めているグループ、沼津市社会福祉協議会等とのネットワークができてきている。本事業では、そうしたネットワークを活用して、より多くの地域住民の参加を促し、更に、互いに協力し合える人たちとのネットワークを広げていきたい。</p> <p>また、認知症当事者を講師に招いた勉強会+住民対話の形で、住民が認知症を「自分事」ととらえて課題に主体的に関わり、自らの地域でも認知症の人が幸せに暮らせるあり方を考えていく本事業によって、この地域の住民の認知症に対する意識が大きく変化していくことが期待される。また、本事業を通して、今は認知症であることを公言できずに孤立している住民も、共に、認知症の人にとって生きやすい地域を作っていくひとりとして地域の公の場に参加できる環境を作っていきたい。</p>
<p><b>地域性</b></p>	<p>今回、活動の拠点とする今沢には、既に、地域の高齢者の生き方と介護を考える「中今沢結いの会」が活動をしており、定期的に勉強会を開いたり、「見守り・声かけ」の体制作りを進めている。本法人も彼らの活動にオブザーバーとして参加したり、情報交換をしたり、あるいは、結いの会のメンバーが法人主催の認知症フォーラムに参加したりして、互いの関係づくりにつとめてきた。本事業でも、中今沢結いの会と密に連携しながら、また、今沢団地、北今沢地区でも、民生委員等に呼びかけることで、より多くの地域住民が認知症に関心を持ち、本事業に参加できるように、協力の輪を広げていきたい。</p>
<p><b>必要性</b></p>	<p>70年代の新興住宅地と公営団地とを中心とした今沢地区は、現在65歳以上の住民が全体の40%以上を占める超高齢化した地域である。そこでの課題は、この地域でいかに高齢者が生き続けられるか、ということであり、そうした切実な課題があるからこそ、中今沢では、互いに見守り合ったり、助け合ったり、あるいは高齢者がより住みやすい地域を作っていくために勉強したりする「中今沢結いの会」を住民主体で発足させたのである。</p> <p>ただ、そうした互助的な活動が進む中でも、特に認知症に対する住民の理解はまだまだ浅いというのが現実だという。地域住民の中には、「認知症になったらおしまい」「ああはなりたくない」という認知症に対する偏見がまだ根強く、そのため認知症の本人が家に閉じこもってしまったり、介護している家族も親や配偶者が認知症であることを隠さざるをえないケースも多い。また、周辺の住民と本人、介護家族との間が没交渉になったり、周辺住民の理解が得られないことによるトラブルが発生してしまうこともあるという。</p>

	<p>だが、これから 700 万人以上の人が認知症になると言われている状況においては、高齢になっても安心して住み続けられるような地域にするためには、地域住民が認知症について正しい理解をするとともに、認知症を「自分事」として受けとめて、認知症について地域全体で取り組んでいく事は決して欠かすことのできない課題である。</p> <p>本事業は、VR 認知症を体験したり、認知症当事者に話を聞くことで、地域住民が認知症を「自分事」として考えるきっかけを作りとともに、住民や専門職、行政職員等の参加者の対話を通して、今、この地域にとって切実となっている課題に実践的に取り組んでいくものであるという点で、必要性は高いと言える。</p>
<p style="text-align: center;"><b>先導性</b></p>	<p>今年の 4 月下旬に、京都で認知症国際会議が開かれた。そこでは、200 人以上の認知症当事者が各国から参加し、専門職も当事者も同じステージに立って対話をし、認知症に優しい社会を実現するための議論を行ったのである。そこで共有されたのは、認知症に優しい社会を作っていくには認知症当事者の視点は欠かせない、ということだった。</p> <p>おとしには、日本でも、認知症への偏見をなくす啓蒙活動をしたり、国の認知症施策へと提言していくための認知症当事者の集まり「日本認知症ワーキンググループ」が発足し、その働きかけによって政府の打ち出した新しい認知症施策「新オレンジプラン」に当事者の視点を重視することが盛り込まれる等の成果を挙げている。</p> <p>こうした認知症当事者の視点を重視しようとする動きは日本各地にも広がっており、近隣では富士宮市で「富士宮モデル」と称される、認知症当事者と共に認知症に優しい地域を作っていく試みが行われていて、世界的にも注目されている。</p> <p>だが、沼津市を振り返った時、まだこの地域には認知症当事者として公の場で発言をする人もおらず、市の政策に認知症当事者の意見が反映される仕組みもない。これでは、認知症サポーターの数をいくら増やしても、本当の意味での認知症への理解は深まらないし、偏見の中で孤独に生きている認知症の当事者や家族は希望を持つことはできない。</p> <p>本事業では、今沢という限られた地域ではあるが、富士宮市や仙台市などでの試みに学び、当事者の話を実際に聞きながら、地域住民と専門職、行政職員とを交えた対話によって、認知症当事者とともに認知症になっても安心して暮らしていける地域を作っていくための実践的な議論をしていく。そうした試みは沼津で初めてであり、本事業が一つのモデルとなって、沼津市における認知症をめぐる社会の在り方が変わっていくことを期待している。</p>
<p style="text-align: center;"><b>継続性</b></p>	<p>これまでも述べてきたように本事業は、今沢地区を認知症の人が当たり前で暮らせる地域にしていく方法を地域住民主体で考えていくための対話の場作りである。つまり、本事業は、その成果を来年度以降の今沢地区における具体的な実践に繋げていくことを前提としている。具体的な実践内容は、本事業を進めるプロセスの中で参加者とともに見極めていくが、例えば、認知症の本人も家族も、地域住民も共に参加できるサロンを開催していくことや、認知症の人でも安心して買い物ができるように地域の商店に協力を求めることなどが考えられるだろう。また、そうした実践活動に並行して、本年度のような形で、認知症についての勉強会＋住民対話を来年度以降も定期的で開催していくことも必要なのではないかと考えている。</p> <p>そうした活動を継続させるために、来年度もまちづくりファンドのステップアップ事業に申請したり、あるいは他の団体の助成金の申請したりすることとともに、NPO 法人の会員に協力を求めたり、勉強会やサロン等の集まりで参加費を参加者に負担してもらうなど、財務的な面でも様々な方法を今後検討していきたい。</p>